

Title	トウルファン出土高昌墓センの源流とその成立
Author(s)	張, 銘心
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44776
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	張 銘 心
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 18079 号
学位授与年月日	平成 15 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	トウルフアン出土高昌墓塚の源流とその成立
論文審査委員	(主査) 教授 荒川 正晴 (副査) 教授 森安 孝夫 教授 桃木 至朗

論文内容の要旨

本論文は、中国内地の墓誌の検討を中心に据え、そこから中央アジアのトウルフアンに造営された漢人墳墓より出土した墓塚（高昌墓塚）の源流とその成立過程を明らかにしようとしたものである。全体は、「研究篇」として、高昌墓塚の源流を検討する第一章と、高昌墓塚の成立に関わる問題を扱った第二章からなる。これに、高昌墓塚に関する網羅的なテキストを含む「資料篇」が付される。

まず第一章では、後漢～南北朝時代の中国内地墓誌について、その形態と地域間偏差に着目し、まずは後漢・魏晉期、五胡十六国期、北朝期のそれぞれの墓誌を取り上げて分析し、次いで東晋・南朝期の墓誌を検討する。墓誌とは、地上の墓碑に対する語で、地下の墓室内に埋納されたものを指し、形態から見ると、中国内地では華北を中心に碑形の墓誌が、これに対して江南方面では方形の墓誌が中心となった。

本章では、後漢～西晋において洛陽を中心として出土していた碑形墓誌が、五胡十六国期には、洛陽を中心とする地域では出土例が皆無となり、替わって武威を中心とする五涼政権期の河西地域からこれが出土するようになること、またこの河西地域から出土した碑形墓誌は、それまでとは異なる地域的な特徴を有することなどが指摘されている。形態的な特徴は、墓誌の頭頂部が丸い碑形であることで、銘文にはすべて墓表と言う語が統一的に使用されている。本論文では、この河西の特徴的な墓誌を「河西圓首碑形墓表」と呼ぶ。

また北魏が華北を統一すると、圓首碑形墓誌が用いられる主要な地域は、河西から平城を中心とする山西へと移った。さらに北魏が平城から洛陽に遷都するに伴い、洛陽周辺において墓誌の使用事例が再び確認できるようになる。ただし、平城周辺の圓首碑形墓誌で洛陽へと伝播するものがあるものの、洛陽ではほとんどこれが普及することはない、碑形墓誌の使用はその後、一部の例外的な事例を除き、復活することはない。

これに対して、江南方面では、東晋以前には墓誌を用いるという埋葬習俗は存在しなかったが、東晋以降になると、南京を中心とする地域で墓誌が出現する。しかしその形態は、西晋時代のような碑形ではなく、四方形のものへと変化している。つまり東晋墓誌は西晋の碑形墓誌を継承せず、方形墓誌という形式を新たに生み出したことになる。また東晋前期の墓誌形態は、当初、多種多様であったが、後期には基本的に縦長方形の形に収斂し、さらに南朝期には墓蓋を有する正方形となった。

北魏の洛陽において、六世紀に正方形の墓蓋付き墓誌が多く使用され、それが隋唐に継承されていくが、それは華北の墓誌の伝統ではなく、南朝の影響によるものである。

第二章では、第一章で得た知見を踏まえ、高昌墓埴の成立に関わる諸問題について検討する。まず高昌墓埴の発生時期を確定するために、従来、高昌墓埴の原初的なものと見られてきた「且渠封戴墓表」について再検討する。分析の結果、この墓表は「河西圓首碑形墓表」に属するものであり、高昌墓埴とは直接には繋がらないことを明確にしている。

次に、これまで年代が確定されていなかった、紀年の無いトゥルファン出土の墓埴三件を検討し、これらが五涼政権時代のトゥルファン(高昌郡)で作成された墓埴であり、これこそが高昌墓埴の原型となったことを明らかにした。現時点では、この五涼政権時代に作成された無紀年墓埴の来源を、中国内地の墓誌に求め得るかどうかは確定できないが、この無紀年墓埴さらに高昌墓埴が、墓室ではなく地面近くの墓道に置かれるという、この特異な埋納方法は、トゥルファン特有のものではなく、中国内地の墓誌にその来源を求めると指摘する。

以上より、高昌墓埴は、トゥルファン特有の性格を有し得るものの、基本的には同時代の中国内地の墓誌にその淵源を求めると結論する。

論文審査の結果の要旨

高昌墓埴の研究は、1930年代にトゥルファンの古墳群が発掘されて以来、豊富に蓄積されてきたが、それらは基本的にトゥルファンの政治体制や社会に対する分析のみに駆使され、高昌墓埴と中国内地の墓誌との関係については、これまで見過ごされてきたと言って良い。本論文は、この空白部分を埋めるものであり、この研究によってはじめて、高昌墓埴と中国内地の墓誌とをトータルに捉えてゆく手掛かりが得られたと評価できよう。

また研究方法においても、これまでの高昌墓埴や魏晋南北朝時代の墓誌に対する研究は、主に文字面に重点を置いて検討してきた。本論文の大きな特徴は、こうした従来の研究手法に対して、高昌墓埴や魏晋南北朝時代の墓誌の形態面に着目して分析を加えたところにある。高昌墓埴や中国内地墓誌の研究に対する新たなアプローチとして注目され、文字面の検討だけでは明らかにし得ない知見が盛り込まれている。とくに、碑形の墓誌を中心とする華北で、五胡十六国時代において、河西地域に「墓表」を自称する「圓首碑形」の墓誌が出現したこと、また北魏では、この「河西圓首碑形墓表」を継承するものの、正方形を中心とする南朝の墓誌がそれに替わり、後の隋唐以降の墓誌の原型が完成した、という見解は、今後の墓誌研究に大きな一石を投ずるものとなる。

さらに、こうした考古学的方法を取る研究の前提として、現段階で得られるすべての考古発掘調査報告に詳細に目を通し、高昌墓埴および中国内地墓誌の形態面に関わる詳細な情報を、文字面とともに整理しておく必要があるが、本論文に添えられた「資料篇」は、それが着実に行われていたことを示している。この点も、高く評価できる点である。

このように本論文は、従来の墓誌研究を深化させた論文として評価できるが、なお今後、検討を要する課題も少なくない。まず、詳細に分析している中国内地墓誌に対する検討に比して、高昌墓埴に関する検討がやや手薄になってしまい、高昌墓埴自体の成立過程が鮮明に描き切れなかった部分が認められる。

次に、高昌墓埴や中国内地墓誌の形態面に対する分析に集中するあまり、それらの時代的な推移については明確にしたものの、そうした変遷がどのような政治的・経済的・社会的な背景のもとに生起しているのか、歴史研究として基本的な追究が不十分となった部分があった。とくに、地上の墓碑を指す「墓表」という語が、何故に地下の墓室内に置かれた墓誌に名づけられたのかは、墓誌に関わる根本的な問題でもあるので、今後、さらに分析を深めてゆく必要がある。

以上にあげたように、今後に残された課題も少なくなく、また本論文の論証のあり方にも、なお改善すべき点は認められるが、本論文は従来の高昌墓埴および中国内地墓誌の研究を大きく進展させた意欲的な業績である。本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。